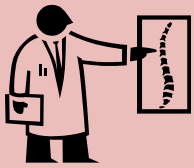


# 伊藤外科ニュース



## 93号

2012.03 発行

相変わらず寒い日が続きますが、皆さんいかがお過ごしでしょうか？

東京に過ごしていて寒いのですから、東北で被災された方々はさぞ厳しい冬を過ごされている事でしょう。通院されている患者さんで、仮設住宅の防寒工事に従事されている方がいらっしゃいますが御苦労されている事と思います。体調を崩さず帰京してください。

さて、寒い冬の夜にはお風呂で温まって布団に入るの一番ですね。

私はお風呂が大好きで、夜は勿論の事、毎朝早く起きて新聞を持ち込みながら30分ほど風呂に浸かってから出勤します。大学病院勤務時代には、学会などで地方に行くと温泉を楽しみました。特に思い出深い温泉は、岩手県の網張温泉です。

約15年前、新しく立ち上げた脾臓の病気を治療する「脾臓班」の仲間と研究会に出かけた際にこの温泉に泊まりました。宿屋の主人から山奥の秘湯の存在を聞き、真っ暗な山道を懐中電灯と熊避けの鈴を持ってお湯に浸かりに行きました。風呂場の周りの景色は暗くてわかりませんでした。お湯があまりにも熱かったので岩風呂に川水を入れて入れた記憶があります。

この野趣に富んだ温泉の事は、皆が集まるといつも楽しい話題となります。若い人はシャワーで済ませる方が増えているようですが、私は湯船にゆっくり浸かってリラックスする事が一日の中で重要な行事で健康の秘訣と思っています。

## アレルギー性鼻炎のおはなし

今回は、花粉症(アレルギー性鼻炎)の話を書きたいと思います。

我が家は、私を含めて全員がこの病気と付き合っています。約20年前には、私の周辺には家内以外に治療が必要な花粉症患者はいませんでした。そこで、花粉症はかなり珍しい病気であると私は認識しておりましたが、その数年後突然私は発症しました。統計上は1998年のアレルギー性鼻炎の有病率は29%、2008年では40%と急激に上昇しています。

アレルギー性鼻炎の症状はクシャミ、水性鼻汁、鼻閉であり、この時期はカゼの初期症状と患者さんは区別が困難です。花粉症の治療の柱は、花粉症の起因物質であるスギなどの花粉からマスクやメガネなどを使用し抗原回避する事と薬物療法が主体です。薬物療法では、抗ヒスタミン剤の内服と鼻噴霧用ステロイド剤、抗アレルギー作用を持つ点眼薬が使用されます。伊藤外科でも、アレルギー性鼻炎診療ガイドラインの内容に沿って治療を行っています。

この時期の外来には様々な感染症の患者さんがいらっしゃいます。下痢や嘔吐の急性胃腸炎の方、インフルエンザの方、感冒の方、扁桃腺炎の方など様々です。寒さ対策をして春を待ちましょう。



院長

伊藤外科 HP <http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp>

(バックナンバーは HP にて公開中です)



## 今回の一冊

# 古風堂々数学者

藤原正彦

先日、お誘いがあった、藤原正彦氏の講演会に行ってきた。数年前のベストセラー『国家の品格』の著者として知られる藤原氏。ご存知の方も多いと思うが、氏は、物書きとしてはサラブレッドである。なにしろ父上はあの新田次郎で、母上も同じく作家の藤原てい。読んだなあ～、新田次郎。若かりし頃、特に氏の山岳小説をむさぼるように読んだ時期がある。なので、講演会であらためて驚いたのが、「あの新田次郎のご子息が、もうこんなオッサンなんだ！」ということ。歳月の流れの早さに、講演内容とは関係ないところでしみじみとしてしまった。

講演で話されたことは、『国家の品格』とほぼ同じ内容だったように思うが、やっぱり肉声で聞くと説得力が増してくる。氏は引き続き、日本を、日本人を憂えています。生意気なものいいでたいへん失礼だが、同感。かなり激しく憂えているのだが、持ち前のユーモアがそこにちゃんと愛を添えている。

藤原氏の講演に行くということもあって、三弓の本棚から氏の著作を探してみたら、『古風堂々数学者』（新潮文庫）が見つかった。そう、藤原氏の本業は「数学者」である。そもそも、なぜ数学者がもの書きになったのかと思っていたが、道の入り口をつくったのが父・新田次郎であったことを、この本で初めて知った。

本書は2000年前後に書かれたエッセイをまとめたものである。この頃からすでに、日本・日本人を憂えてました。氏の「現代の日本・日本人」を捉える基軸になっているのは、アメリカとイギリス暮らしの経験だ。本書のなかでも、氏はこう記している。「日本とアメリカの二点にイギリスが加わり、三点観測が初めて可能になったとも言える。表と裏しか見えぬ二点観測に比べ、側面まで見える三点観測は、それまでと比べ立体感のある視座を提供したようだった」。

本書のなかで氏が何度も強調するのが、「日本の教育現場において、もっとも重点をおくべきは、国語教育である」ということ。「国語は、言語教育という要素にとどまらず、すべての思考および情緒の基盤となるからだ」。にもかかわらず、義務教育のカリキュラムはどんどん方向違いへと向かっていっている。

そういえばこの4月から、義務教育に武道（剣道・柔道・相撲）が必修科目になるらしい。剣道は胴着に、相撲は土俵にお金がかかるという理由で、多くの学校は柔道を選択したが、柔道経験のない先生たちが、授業のためににわか仕込みで柔道を教わり四苦八苦ししているとか。柔道は致命的な怪我をする可能性が高いということで、これを問題視する報道をみたが、そもそも武道とは、技だけでなく、その精神の鍛練が不可欠なもの。にわか仕込みの先生に、なにが教えられるというのだろうか！ 藤原氏ならずとも、憂えます、平成のニッポン。

あっ、この本、氏の幼少期のことも綴られていて、次郎父・てい母のもと、いかにして「古風堂々たる藤原正彦」が誕生したかも垣間見られる一冊です。